

指定討論コメント

秦方(首都師範大学)

まず、渥美財団のご招待に感謝の意を申し上げます。新型コロナウイルスが猛威を振るっている今のこの時期に、先生方の歴史における防疫観念と実践に対するご検討を聞かせて頂き、大変勉強になりました。

私自身の専門は近代医療史や防疫史研究ではないので、この度の会議で発表された三つの論文に対して、大まかなまとめとコメントを述べさせていただいてから、今の疫病と防疫の発展と結び付けて私の感想を加えて述べたいと思います。

この三つの論文のテーマは非常に明確で、いずれも近代中国、日本と朝鮮が伝統的社会から現代へ転換する歴史を背景としており、その中で各国がこうした過程において具体的な疫病にどのように対応し、関連する防疫観念をどのように推進したかが検討されていました。朴漢珉教授と市川智生教授はそれぞれ近代朝鮮と日本居留地における疫病の拡散と防疫措置を検討し、異なる開港口における疫病の特徴と各政権の疫病対策に注目しています。また、余新忠教授は近代中国の新しい国家政権と変革の中で紳士階級が、文明・衛生的現代防疫観念をどのように確立・推進したか、またこの推進過程で現れた権力関係を検討しました。

この三人の先生のご研究と関連して、私は以下三つの方面から私自身の考察を述べさせていただきます。拙意でございますが、先生方には色々と教えてくださいよう、お願いいたします。

1. 区分と連結

もし大まかな区分を許せば、近代は区分と連結が併存する時代だと言えます。近代国民国家の確立、世界植民地の拡大が継続的に進行している中で、こうした傾向がもたらした重要な結果の一つは、区分に使う新しい単位の頻出です。例えば、複数の文献に多数言及される近代国家、居留地などが、新しい政治区分、行政区分、経済区分、空間区分を示す単位として現れてきました。その一方、疫病の発生と伝播は、間違いなくこうした人為による区分に衝撃を与えました。ウイルスや細菌は具体的な物体や身体にくっついており、世界を渡り歩く商人、兵士、使節、船、貨物などの経路によって拡散されていきます。疫病の爆発はこうした現代的、人為的な区分の無効性や遅れを暴露し、さらにこうした区分は逆に疫病の発展を促進してしまいました。区分の無効に直面する際に、人々は一時的な協力と連結に頼って、共通の防疫知識と体制を共有することによって、疫病を最終的に抑えることができます。この過程における疫病の発展状況に応じて、新しい区分がまた生成される可能性があります。

実際、今回の新型コロナウイルスの爆発も、区分と連結の複雑さを私たちに示してくれました。ウイルスがグローバルな存在になった時、ウイルスが進化・拡大している時、膨大なシステムが浮かんでくるのが意識されます。このシステムの上に、世界保健機関のような国を超える単位があり、各国の民族がいます。下の方を中国に例をして見ると、現在は精確な防疫の段階に入り、省、市、区、個人が住んでいる団地が、精確な防疫の有効な区分単位となり、時には一つの通りしか隔てて

いないのに、行政区分によると、あなたの住んでいる団地が疫病リスクエリアに分類されてしまうかもしれません。こうした区別は団地内の人々の生活範囲と様式(例えば、家で隔離するか、ほぼ自由に出勤できるか)に大きく影響を与えます。その影響は、交通機関の発展に伴い、疫病の拡大もより深刻になってきました。そのため、空港、駅、バス停のような交通システムは、もともとはその利便性で評価されてきましたが、今は逆にシステム全盤の弱点となってきました。疫病の突発的な拡大と緊急事態に対応するため、いかに柔軟かつ効果的なシステムの運営を形成させるかは、歴史的な面と現実面において持続的に考えなければならない問題です。

2. 平等と階級

現在の疫病を語る言説において、よく聞かれる比較項は、顔が分からず数字だけが増えていく「感染者」vs 社会的知名度のある「感染者」です。感染という問題においては、誰もが平等で、誰でも感染する可能性がある訳ですが、「感染」を語る際には、一種の階級制が強調される傾向があります。もしウイルス自体には差がないと言えるなら、ウイルスをいかに認知・防止・治療することができるかが、社会における階級制と権力関係を示しています。この点については、今回発表された三つの論文でも多少言及されていました。植民地システムにおける自国民と植民地の人々の防疫をめぐる権力関係もあるし、新しい国民国家の枠組みに存在する異なる階層(例えば、貴族階層、官吏階層など)が防疫観念によって自らの主導的地位を再確立することもあります。このことが私に、Susan Sontagの著書『病気の隠喩』にある観点を思い出させました。それは、病気を通して、人々はいったい何を話しているのか、人々はいったい何を話したいのかという観点です。今回の疫病の爆発に際して、私たちは「疫病」を利用して、国家権力、国際関係、生命権利、家庭構造などのより深く、より複雑な問題について議論しています。これらの議題は歴史的な角度から再分析・再考察できると思います。それによって、私たちは疫病と防疫をより広い次元で理解できると思います。

3. 共同体やコミュニティという非公式の関係

今回の三名の研究者のご高論の論点は、主に国と社会的次元における防疫をめぐる論述です。これは、個人・家庭から社会・国へという私たちが歴史を認知する段階を示しています。この段階の真ん中に、共同体やコミュニティという環節を加えることによって、承前啓後の役割を果たせることができると思います。この共同体やコミュニティとは、近代における北京四合院、上海里弄のような居住、近隣関係を中心としたコミュニティであってもよいし、近代都市で依然として重要な役割を果たしている拡張家庭(extended family)であってもよいと思います。また近代教育と職業によって構築された友情ネットワークであってもよいのだと思います。要するに、共同体やコミュニティは柔軟な存在、ひいては曖昧な中間地帯として新しい関係、体制、構造を生成するような存在であって良いのです。なぜ私が共同体とコミュニティの観念を引き合いに出したかと言いますと、今回の疫病によって、学校や会社のような組織や機関が個人と関連する有効な機関にならず、逆に重点予防対象になってしまい、私たちが住んでいる団地が代わりに重要な役割を果たしたからです。防疫物資が乏しい状況において、親戚や友人といった非公式な関係が往々にして物資を得る間接的な方法になり、多くの人々が国や市場からマスクなど不足している物質を直接購入できないため、親戚や友人が代わりに有効なネットワークとし

て、物質の流通と共有に大きな役割を果たしました。無論、このようなやり方が新しい問題を引き起してしまうことを否定するつもりはありませんが、ただ、今回の疫病流行を、社会と国の体制、特にその基礎的な運営モデルについて改めて反省させる機会を私たちに与えてくれたことは事実だと思います。

以上が私の簡単なコメントと考えです。ご清聴、どうも有り難うございました。